

芸劇ウインド・オーケストラ 第3回演奏会

指揮：鈴木優人

多才な音楽家が導く 吹奏楽の新境地

若手の精鋭集う芸劇ウインド・オーケストラの第3回演奏会の指揮は、多才な活動が際立つ鈴木優人。彼に公演への意気込みやプログラムの注目点を聞いた。

若い奏者の可能性と吹奏楽の色彩を追求する

バロックから現代音楽まで幅広いジャンルに精通し、指揮者やオルガニストとして活躍する鈴木が芸劇ウインドを振るのは、2015年11月の「東京芸術劇場 開館25周年記念公演」以来2度目となる。

「前回は、リハーサルを重ねるごとに予想以上の変化を遂げ、彼らの可能性の大きさを実感しました。ほぼ全員が息を使うウインド・オーケストラは、息を出す体温が演奏に影響します。その意味でたぎる熱気の片鱗を見ました。ただ前回は3部ある公演の1部のみ出演。もっと色々な側面があり、また彼らの中にも多様な可能性への欲求があると思います。今回はそれを信じて、より濃密な演奏を目指したいですね」

前回は違ったフルサイズの公演である点は大きい。「オルガニストとして心がけているのは、モノクロームな演奏にならないようにすること。オルガンはメカニックなので、ただ音が出ているだけの演奏になりがちですが、吹奏楽も同じような気がします。「吹奏楽」という1つの色ではなく、沢山の色彩や景色や模様のある演奏会をするのが、今回の目標。ハードルは高いので、心してかかりたいと思っています」

鈴木木の個性を反映した類のないプログラム

プログラムは3つの視点で構成されている。まずは鈴木木の活動の主軸をなすバロック音楽。

「ここではパイプオルガンと吹奏楽の繋がりを試したい。開幕のファンファーレ的な『水上の音楽』の1曲に続いて、芸劇ウインドのためにアレンジしたバッハの『パッサカリアとフーガ』を、オルガンの響きを意識しながら演奏し、ホールにあるパイプオルガンのDNAを芸劇ウインドにインストールしたいと考えました」

2つ目は、モーツァルトとR.シュトラウスの管楽器のためのセレナード。「大作曲家が管楽器のために書いたオリジナル作品で、独自の響きやソロの音色を聴いて頂きます。長いモーツァルト作品は、開始と最終楽章に天国的なアダージョの第3楽章を挟みます。モーツァルトの語法は多彩で、例えばスタッカート1つとっても様々な種類がありますから、その“しゃべり方”がポイント。



2月25日(土) 15:00開演 コンサートホール

指揮：鈴木優人 吹奏楽：芸劇ウインド・オーケストラ

ヘンデル(鈴木優人編) / 水上の音楽より「アラ・ホーンパイプ」 J.S.バッハ(鈴木優人編) / パッサカリアとフーガ 短調 BWV582
モーツァルト / セレナード第10番 変ロ長調「グラン・パルティータ」より(1、3、7楽章) R.シュトラウス / 13管楽器のためのセレナード
新垣隆 / 委嘱作品(世界初演) ラヴェル(真島俊夫編) / パレ音楽「ダフニスとクロエ」第2組曲

主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) / 日本経済新聞社 / ジャパン・アーツ

詳細はP12へ

鈴木優人×新垣隆による事前レクチャー開催!

2月6日(月) 19:00~21:00 東京芸術劇場シンフォニースペース(5階)
参加費：500円(公演チケット購入者無料) ※定員100名/先着順 申し込み詳細はHPをご覧ください。



鈴木優人

©Marco Borggreve

シュトラウスのセレナードは、とろけてしまいそうなほど美しい作品です」
3つ目は、今回の目玉でもある新垣隆の新曲(世界初演)とラヴェルの『ダフニスとクロエ』第2組曲。

「20世紀以降の実験的な響きのセクションです。新垣さんは、私が設立したアンサンブル・ジェネシスのレジデントコンポーザーで、2005年から一緒にしています。シンプルながらも巧みな書法で作曲されますので、楽しい作品ができるのを楽しみにしていますし、一方では思いの丈をぶつけた実験的な音楽を期待してもいます。『ダフニスとクロエ』は、吹奏楽で1番人気のクラシック作品である点に興味をそそられ、また緻密な書法が新垣さんのフランス的な技法とのコラボに相応しいと考えて選びました。今回は亡き真島俊夫さんの編曲版を用いる予定。Eトクラリネットの活躍が特徴的な、シンプルかつ明快なアレンジで、若々しい演奏に向いていると思います」

芸劇ウインドは東京芸術劇場が取り組む、次世代のプロフェッショナル音楽家育成プロジェクトでもある。

「演奏レッスンやキャリアアップゼミなどを含めて3年目ともなれば、元々優れたメンバーたちがさらにブラッシュアップしているはず。今回はお客さんにとって魅力的なものを一生懸命考えたプログラムですから、一人でも多くの人に聴いて欲しいと願っています」

取材・文：柴田克彦(音楽評論家)



©NEUES AKKORD

新作委嘱 新垣隆(作曲家・ピアニスト)

鈴木優人さんと私との関係は——これはあまり知られていないかも、と思うのですが(って別にあやしい事ではありません…)——彼の主宰する、古楽から現代に至るあらゆるスタイルの音楽を楽々と渡り歩くアンサンブル・ジェネシスというグループの「専属作曲家」でありました。一方で、吹奏楽作品の作曲は——これは言いにくい事なのですが(というの、つまり、ちょっとあやしい事です…)——何度か経験があります。という事で、今回のこの「自分にとって奇妙に振れたふたつの再会」は、鈴木さんがオルガン奏者であるという事でこれまた奇妙に話が収まってしまうという…ってひとりでごちゃごちゃな言ってんだかさっぱりわからない話ですね。すみません。何はともあれ(?)、今回鈴木さん、そして芸劇ウインドの皆さんと御一緒出来ることを心待ちにしています。音楽のエネルギーで火花を散らしましょう! 読者の皆様もご期待ください!

エリアフ・インバル指揮 ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団

エサ=ペッカ・サロネン指揮 フィルハーモニア管弦楽団

これぞ極めつきの コンビによる 名演を聴く!

ベルリン、そして、ロンドンから。

激戦区で、独自の存在感を

発揮しているオーケストラと名指揮者+名手たちが
つくり出す、すばらしい音楽の世界へ。

円熟の巨匠インバルによるマーラー。

これぞ極めつきの名演にじっくりと接したい。

有力オーケストラがひしめくベルリンの地で独自の存在感を発揮しているベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団が創設されたのは、1952年のこと。当初は、ベルリン交響楽団の名で活動したが、日本語でベルリン響という表記の楽団は、旧西ベルリンにもあったため、こちらは、旧東ベルリンのというよりも、あの名匠クルト・ザンデルリンクの手兵として親しまれてきたオーケストラである。ザンデルリンクの時代(1960~77年)は、音楽に対する献身的な姿勢とドイツ儀儀の深さを兼ね備えた楽団として高く評価されていたが、2006年に現在の名称となり、さらにアンサンブルの洗練度を増しているのが印象的。コンサートマスターを務めている日下紗矢子にインタヴューした際にも、オーケストラが培ってきた響きを大切にしながら、より精度の高い音楽づくりを目指していることが実感できた。

指揮者のエリアフ・インバルは、イスラエル生まれ。1980年代からマーラーのスペシャリストとして名高いが、2016年に80歳を迎えても、枯れることなく、つねに刺激的なアプローチを繰り返している巨匠である。2001~06年には、このオーケストラの首席指揮者を務めており、勝手知ったる間柄である上に、今回のメインの演目であるマーラーの交響曲第1番《巨人》は、スコアの隅々まで知り尽くしている楽曲だけに、聴き手が想像している以上の“なにか(「感動」とか「衝撃」といった単語を当てはめていただきたいと思う)”が起こるに違いない。名曲中の名曲であるメンデルスゾーン協奏曲では、五嶋龍がソリストを務めるのも楽しみである。

オ気あふれるサロネンと手兵のコンビ。

オーケストラの醍醐味を丸ごと味わいたい。

ベルリンや東京にも負けず劣らず、オーケストラの激戦区であるロンドンで、華々しい活動を繰り返しているフィルハーモニア管弦楽団の歴史は、1945年に遡ることができる。旧EMI(現ワーナー・クラシックス)の伝説的なプロデューサーであったウォルター・レグが、イギリス中の名手を集めて創設した楽団は、レコーディングはもちろん、コンサートでも、たちまち大評判となった。フルトヴェングラー、R.シュトラウス、トスカニーニらが指揮台にの



指揮：エリアフ・インバル

ヴァイオリン：五嶋龍

指揮：エサ=ペッカ・サロネン

ヴァイオリン：諏訪内晶子

©Ayako Yamamoto

ぼり、カラヤンが実質的な首席指揮者の役割を果たした後、クレンペラーが常任指揮者(後に終身指揮者)を務め、以後、ムーティ、シノーポリ、ドホナーニが率いた時代を経て、2008年からは、エサ=ペッカ・サロネンが首席指揮者を務めている。その鮮やかなアンサンブルに裏打ちされたフレキシブルなサウンドで、まるで個性の異なる指揮者たちの意図を体現した名演は、数多くのディスクからもうかがい知ることができる。

首席指揮者のサロネンは、フィンランド生まれ。当初、作曲家として世に出た後、1983年にフィルハーモニア管弦楽団の公演で、キャンセルしたティルソン・トーマスの代役として、急速、マーラーの交響曲第3番を振り、大成功を収めて以来、指揮者としての本格的なキャリアをスタートさせた経歴の持ち主だ。そして、現在も、ニューヨーク・フィルのコンポーザー・イン・レジデンス(常駐作曲家)として、作曲家として旺盛な活動を繰り返している。R.シュトラウスも、存命中は、作曲家としてだけでなく、指揮者として名声を博した人物だけに、今回の演目である《ドン・ファン》や《ツァラトゥストラはかく語りき》のスコアから、現代を代表するコンポーザー=コンダクター(作曲家兼指揮者)であるサロネンが、鮮やかな響きを引き出してくれることだろう。メンデルスゾーンの人気作でソリストを務めるのは、サロネンのヴァイオリン協奏曲もレパートリーに入れている諏訪内晶子であり、こちらも大いに期待したいところである。

文：満洲岡信育(音楽評論)

エリアフ・インバル指揮 ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団 詳細はP14へ

3月21日(火) 19:00 開演 コンサートホール

指揮：エリアフ・インバル

ヴァイオリン：五嶋龍

管弦楽：ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団

メンデルスゾーン / ヴァイオリン協奏曲 短調 op.64

マーラー / 交響曲第1番 二長調「巨人」

主催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) / 日本経済新聞社 / ジャパン・アーツ

エサ=ペッカ・サロネン指揮 フィルハーモニア管弦楽団 詳細はHPへ

5月20日(土) 18:00 開演 コンサートホール

指揮：エサ=ペッカ・サロネン

ヴァイオリン：諏訪内晶子

管弦楽：フィルハーモニア管弦楽団

R.シュトラウス / 交響詩「ドン・ファン」op.20

メンデルスゾーン / ヴァイオリン交響曲 長調 op.64

R.シュトラウス / 交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」op.30

主催：ジャパン・アーツ 共催：東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)



©Marco Borggreve



©Ayako Yamamoto